令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【辻南小学校】

① 今年度の課題と授業改善策

	学習上・指導上の課題		授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題> 国語では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「書くこと」、算数では、「図形」と「変化と関係」の領域の正答率が低い。 <指導上の課題> 児童が反復・習熟に取り組む時間の設定が不十分である。	⇒	「ドリルパーク」などの学習支援アプリの活用と、「じ・し・や・ク」の視点を取り入れた授業改善を行う。また、学年ごとに系統立てた「自主学習の手引き」を活用し学習環境を整える。その際、児童の学習履歴を「マイプラン」で確認し、個別に学習計画を立てる時間を設定する【週に1度の計画立案と毎日の実施】。
思考・判断・表現	<学習上の課題>国語・算数共に、思考・判断・表現に課題が見られる。国語では、説明文的な文章の構成や内容を適切にとらえる力、自分の思いや考えを適切に表現する能力に課題がある。 <指導上の課題>児童が自己表現する過程を教師が十分に評価できていない。	⇒	児童主体の「さいたま市『アクティブラーニング』型授業」を実践するための「仮説・実践・検証」をサイクルとした学校課題研修の充実、児童一人ひとりの思考の可視化・共有化を目指し、ICT機器を効果的に活用する。また、教科横断的な反復学習などにも取り組んでいく。【学期1回】

② 全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)

知識・技能	国語に関しては、県平均・全国平均よりやや下回った。情報の読み取り、関連付けを理解し回答することに苦手意識がみられた。また、漢字の定着にも課題がありそうだ。 算数では、全国平均とほぼ同じ平均正答率になった。計算問題については比較的回答ができているが、文章問題からの情報の読み取りに苦手意識がみられる。算数だけではなく、国語も同じような課題になっていることから、日々の学習で、どのように情報を読み取らせ、計算につなげていくかの授業改善を行う必要がみられる。また、両教科共に無回答率が高い。算数では10.9%の無回答を出す問題もあった。日々のテストでも無回答率をなくしながら、適度にスタディサプリ、ドリルパークを併用し漢字や計算に関する事項の習熟を毎週水曜日の「未来くるタイム」を活用しながら取り組んでいく必要がある。
思考・判断・表現	国語に関しては、県平均・全国平均を上回った。資料を活用し、自分の考えが伝わる工夫について考えることはできている一方で、「空欄の中に書き入れなさい」のような記述式回答については正答率を下げた。 算数に関しても、県平均・全国平均を上回った。速さに関する問題で、考察ができているかを見る場面では正答率が比較的良い。一方で、国語同様に記述式の回答については正答率を下げた。 上段でも同様に15.6%の無回答率になる問題もあった。引き続き、「さいたま市『アクティブラーニング』型授業」を実践するために「個別最適な学び」と「協働的な学び」を生かした授業展開を学校課題研修として充実させていく。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	・「ドリルパーク」や「スタディ・サプリ」を活用した反復・習熟に取り組む朝学習の時間や、「じ・し・や・ク」の視点を取り入れた授業改善に取り組むことが継続できている。 ・マイプランを活用し、個別に学習を計画する時間を週に1度設定することが継続できている。また自主学習は月に1度、全学年分を校内に掲示することで、子どもたちだけでなく保護者への意識付けをすることができた。	変更なし
思考・判断・表現	B	・児童一人ひとりの思考の可視化・共有化をするために効果的なICTの活用方法について校内で研修を複数回行い、授業の中で実践することができた。 ・思考、判断、表現の向上に向け、全教員が「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業公開(9月～10月)を行い、随時、成果や課題をフィードバックしながら授業改善に取り組んでいる。	変更なし

※評価　A 8割以上(達成)　B 6割以上(概ね達成)　C 6割未満(あと一歩)

④ さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)

知識・技能	国語に関しては、さいたま市平均よりやや下回った。全国学力・学習状況調査の結果と同じように、言葉の特徴や使い方に関する事項、特に漢字の定着に課題がみられる。 算数では、さいたま市平均より下回る結果となった。「数と計算」の領域では、3年～6年共に下回る結果のため、基本的な計算から課題がみられる。さらに単位換算や長さ、図形の面積など苦手とする領域はどの学年も同じ傾向にあり、見通しをもったカリキュラムマネジメントを行っていく必要がみられる。また、漢字や計算に関する事項の習熟をドリルパークやスタディサプリ等を活用しながら取り組んでいく必要がある。
思考・判断・表現	国語に関しては、さいたま市平均をやや下回った。文章を推敲したり、登場人物の行動や会話に注目し、前後の文脈から相互関係を判断して読む力に課題がみられた。しかし、話すこと・聞くことに関しては概ね市の平均を上回っているため、日頃から友達との対話をする中で助言をし合ったり、共通点や相違点を意識したりしながら話を聞くことができている成果である。 算数に関しても、さいたま市平均をやや下回った。学年ごとに苦手な傾向はバラバラであるが、日頃から立式の意味や、考えた理由を伝え合う学習を通して、引き続き、「さいたま市『アクティブラーニング』型授業」を実践するために「個別最適な学び」と「協働的な学び」を生かした授業展開を学校課題研修として充実させていく。

⑤ 授業改善策の達成状況

	評価(※)	
知識・技能	C	週に1度「未来くるタイム」と題し、「ドリルパーク」などの学習支援アプリで習熟の定着を目指した朝学習に取り組んだ。また、「じ・し・や・ク」の視点を取り入れた授業改善や、学年ごとに系統立てた「自主学習の手引き」を活用し学習環境を整えることができた。また毎日の宿題にはマイプランを活用し、個別に学習計画を立てる時間を設定し、計画的に学習に取り組む体制を整えることができた。しかし、さいたま市学習状況調査の結果、「学校の授業時間以外に普段、1日どれくらいの時間、勉強しますか」の質問項目では肯定的な回答が少ないため、今後も自主学習や家庭学習の充実を図っていく必要がある。
思考・判断・表現	B	学校課題研修では、児童主体の授業を実践するために、各教科の特性に応じた単元計画の工夫や教材研究を行うなど努めることができた。さいたま市学習状況調査「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の質問項目での肯定的回答が90%を上回ったため、一定の効果がみられたと考える。また、児童一人ひとりの思考の可視化・共有化を目指し、ICT機器を効果的に活用するため、研修を充実させた。「学習の中でICT機器を使うのは勉強に役立つと思うか」の質問項目では、肯定的回答が3～6学年全員が市の平均を上回り、取り組んだ成果が表れている。

※評価　A 8割以上(達成)　B 6割以上(概ね達成)　C 6割未満(あと一歩)

⑥ 次年度への課題と授業改善策

知識・技能	全体として、国語算数ともにR5年度よりも平均は下回っているため基礎的・基本的な知識・技能の定着に課題がみられる。また個人差も大きく、個別に必要な支援を講じていく必要がある。その際「ドリルパーク」等の、個別に蓄積されたデータを効果的に活かしていきたい。「個別最適な学び」を学校課題研修の中で研究し、個々のやり方に合った学習を推進していきたい。
思考・判断・表現	学習サイクルを見直し、計画的に協働的な学びを通して考えたり、表現したりするような授業展開を学校課題研修で見直していく。また国語や算数において自分の考えを具体的に書くことに課題がみられたため、思いや考えを言葉にしていく学習活動を授業内に位置付けるなど、意図的に設定していきたい。

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【辻南小学校】

⑥ 次年度への課題と学力向上策

知識・技能	どの教科においても知識・技能の定着に課題がみられ、個人差も大きいため、習熟の場面を設けるとともに、個別に必要な支援を講じていく必要がある。どのような方策が必要かを学校課題研修を通して検討する。その際、個別に蓄積されたデータを効果的に生かしたい。業前活動については、方向性を決めることで、課題として挙げられていることについて学校全体で取り組む。また、学年でカリキュラム・マネジメントを行い、習熟を図る時間と場面を計画的に設定する。
思考・判断・表現	本校の「学習サイクル」を見直し、課題の解決に向け、「個別最適な学び」で「情報の収集」して児童一人一人が考えをもち、情報を「整理・分析」する中で自分の考えを広げ、「協働的な学び」を通して他者に考えを「表現する」ことでさらに考えを広め、「まとめ」「ふりかえる」ことで考えを深める、という授業展開を全教員で確認し、実践する。調査では、目的に応じて資料や図表等と結び付けて説明することに課題が見られたため、目的意識・相手意識を明確にして根拠を基に自分の考えを他者に説明する学習活動を、年間を通し意図的に設定する。そのために、「カリマネデザインマップ」で、どの教科のどの単元で、この学習活動が設定できるか検討する。今後も各教科の特質に応じて「粘り強く考え、伝え合い、学びを深める」授業改善に積極的に取り組んでいく。

① 今年度の課題と学力向上策

	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	＜学習上の課題＞ 国語、算数ともに「基礎的・基本的な知識・技能の定着」 ＜指導上の課題＞ 個人差が大きい。 個別に必要な支援を講じていく必要がある。	⇒	・自主学習の取り組みと充実。懇談会で保護者への周知【1学期】 ・家庭学習を補助し、習熟を図る場の設定【1学期】 ・学年ごとに系統立てた「自主学習の手引き」を活用し学習環境を整える。その際、児童の学習履歴を「マイプラン」で確認し、個別に学習計画を立てる時間を設定する。【週に1度の計画立案と毎日の実施】 ・学力向上カウンセリング研修の実施及び学習状況調査等の分析を全教員が行い、自校の課題と把握し、対策を検討。（夏季） ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を学校課題研修の中で研究し実践する。【2学期】
思考・判断・表現	＜学習上の課題＞ 自分の考えを具体的に書くことに課題 国語では、説明文的な文章の構成や内容を適切にとらえる力、自分の思いや考えを適切に表現する能力に課題が見られる。 算数では、立式の意味や考えた理由を伝え合う理科らをつけていきたい。 ＜指導上の課題＞ 思いや考えを言葉にしていく学習活動を授業内に位置付けるなど、意図的に設定。学習サイクルを見直し、計画的に協働的な学びを通して考えたり、表現したりするような授業展開を学校課題研修で見直していく。	⇒	・学習者を主体した「粘り強く考え、伝え合い、学びを深める児童の育成」を目指すための「仮説・実践・検証」をサイクルとした学校課題研修の充実【通年】 ・児童が各教科で身に付けた資質・能力を活用・発揮する場をカリマネデザインマップに位置づけ、教科横断的な指導を実践する。【通年】 ・児童一人ひとりの思考の可視化・共有化を目指し、ICT機器を効果的に活用【通年】 ・カリマネを活用した。教科横断的な反復学習の実践。【通年】

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語では、昨年度より比較的ポイントが平均より高く、特に、我が国の言語文化に関する事項については、市や全国より高いポイントであることがわかった。ポイントが高い中でも言葉の特徴や使い方に関する事項については市の平均を下回った。算数では、昨年度よりポイントが平均より高く、特に数と計算については全国平均を上回ることができた。一方で、図形に関する項目では、図形特有の考え方や空間認知の点で苦手な児童が多いこともわかった。 理科では、全国平均より高い項目が多いが、市平均はすべて下回った。特に低いのは、生命に関する項目。授業で取り扱う内容で工夫が必要であることがわかった。実生活に近づけた体験の多い学習を踏まえ、実験が多く、楽しいだけで終わってしまわないように考察に力を入れた授業展開が必要と考える。3教科共に無回答率が多い。引き続き、学校課題研修である「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を研究し実践することで学力の向上につなげていきたい。
思考・判断・表現	国語では、全国平均は上回っているものの、市平均はすべての項目で下回った。特に、「話すこと・聞くこと」の項目では、聞き取った内容をメモをしたり、聞かれていることを文章にする問題では苦手意識が高い。また、書けている児童も多い反面、問題をきちんと最後まで読まないことによる不正解も見られた。算数では、国語同様に全国平均からは上回っているものの、市平均ではすべての項目で下回った。文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることや、図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することが課題と見られた。国語、算数で苦手な思考・判断・表現の項目では、やはり理科でも同様にポイントが低い。何を聞かれていて、何を答えなければいけないのか。を考えて、自分の言葉としてまとめることが非常に弱い。考えを書く場面では、記述はできているが、正しいキーワードが書き出せていなかったりすることで不正解となる場合が多く見られた。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	・「マイプラン」や「ドリルパーク」を活用した反復・習熟に取り組む。朝学習（未来くるタイム）の時間や、「じ・し・や・ク」の視点を取り入れた授業改善に取り組むことが継続できている。 ・マイプランを活用し、個別に学習を計画する時間を週に1度設定することが継続できている。また自主学習を充実させ、全学年分を校内に掲示することで、子どもたちだけでなく保護者への意識付けを引き続き行う。	変更なし
思考・判断・表現	B	・児童一人ひとりの思考の可視化・共有化をするために効果的なICTの活用方法について校内で研修を複数回行い、授業の中で実践を引き続き行う。 ・思考、判断、表現の向上に向け、全教員が「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業公開を行い、随時、成果や課題をフィードバックしながら授業改善に取り組んでいる。	変更なし

※評価　A 8割以上（達成）　B 6割以上（おおむね達成）　C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語では、言葉の特徴や使い方に関する事項で、当該学年の漢字の習得に個人差が大きかった。また、複数の学年で、敬語の使い分けや、主語と述語の関係を捉えることなどに課題が見られた。算数では、「数と計算」の領域で、四則混合の式の設問や整数・分数・小数の混合計算の設問での正答率が低かった。また、グラフの読み取りや単位量あたりの大きさの立式に関しても課題が見られた。算数の授業では、どの学年もタブレットを活用し、自由進度などの学習方法を取り入れて学習を進めているが、定着を図る工夫の必要を感じる。社会、理科も同様に知識・技能について課題が見られた。特に理科では実験したことと用語が結び付いておらず適切に表現することに困難さがある。どの教科でも、学習したことを活用する場を意図的に設け、知識・技能の定着を図ることができるよう、カリキュラムマネジメントを行う必要がある。また、児童一人一人の習熟度について確認し、個人差に対応する必要がある。
思考・判断・表現	国語では、目的に応じて必要な情報を見付けて読む力、相手に伝わるように話の構成を考える・話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉えるといった話す聞く力に課題が見られた。算数では、これまで課題であった図形に大きな落ち込みはなかったが、グラフを正しく読み取ったりデータをまとめたりすることに課題が見られた。理科では、実験結果を基にして考察し結論を導きだすことに課題があり、問題解決の活動を充実した授業展開を検討する必要がある。無解答率が年々低下しているのは、日頃から書く活動を設定してきた成果と考えられる。さらに、授業者が教科の特質を捉えて児童に考えをもたせる活動を工夫し、考えを伝え合う活動に積極的に取り組んでいく必要がある。引き続き、「さいたま市『アクティブラーニング』型授業」を実践するために「個別最適な学び」と「協働的な学び」を生かした授業展開を学校課題研修として充実させていく。

⑤ 学力向上策の実施状況

	評価（※）	
知識・技能	C	業前活動で「未来くるタイム」と題し、タブレット端末を通して様々な活動に取り組む時間を設定したが、学年ごとに内容を決めていたので、課題解決に向けて学校全体で取り組むようにしたい。また、「じ・し・や・ク」の視点を取り入れた授業改善に、全教員で取り組んだ。学年ごとに系統立てた「自主学習の手引き」を活用し学習環境を整えることができた。高学年では、「マイプラン」で家庭での学習計画を個別に立て、計画的に学習に取り組む体制を整えることができた。学校で習熟の時間を設定するとともに、個人差も大きいので、家庭と連携して自主学習や家庭学習の充実を図っていく必要がある。
思考・判断・表現	B	学校課題研修では、児童が主体的に取り組む授業を実践するために、カリキュラム・マネジメントをしながら単元計画を工夫し、教材研究を行った。また、児童一人一人の思考の可視化・共有化を目指し、ICTを効果的に活用するため、研修を充実し、授業で積極的に取り入れた。どの学級でも児童がタブレットを使う活動が見られ、一定の効果があったと考える。しかし、タブレットを活用した自由進度的な学習で、共有がデータの他者参照にとどまり児童が自分の言葉で説明できるか不明であったり、授業のまとめが全体で確認されなかったりすることもあった。学力の定着・向上のためには、ICTで共有するだけでなく、児童が身に付けた力を話合い等で活用・発揮することが必要である。

※評価　A 8割以上（達成）　B 6割以上（おおむね達成）　C 6割未満（あと一歩）

令和8年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【辻南小】

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する資質・能力	粘り強く考え、伝え合い、学びを深める児童の育成
⇓	
実施する学力向上策【時期・頻度】	(1)授業者が児童に身に付けさせたい力を明確にし、「考えをもつ・広げる・深める」の学習サイクルの定着を図る。そこに到達するために、各教科の特質を踏まえた単元計画の工夫や学習形態の多様化を図り、児童が自分に合う学び方を自ら選択し、主体的に学ぶことができるようにする。(通年・各教科実践) (2)学校課題研修が「考えをもつ・広げる・深める」の学習サイクルを基盤とし、教科グループごとの授業実践を通して「深い学び」への理解を深める。また、「し・し・や・く」の視点で授業改善を行うためにICT機器の活用方法を常日頃から研究し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指しながら児童の確かな学力につなげる。(通年)

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	国語、算数共に、基礎学力の定着は認められた。 国語では、「読む」力は正答率が高かった。一方で、「情報の扱い方に関する事項」については、他の領域に比べ課題が見られた。また、表現の工夫を「選択」することはできても、「自ら構築し、記述する」という場面においては、苦手にしていることがわかった。「書くこと」の観点でも課題が見られた。 算数では、計算処理能力は高いものの、「図形」の概念理解・空間認識においては、他の領域に比べ正答率が低かった。「思考・判断・表現」の観点では、なぜそうなるのかを説明する場面でのつまずきが見られた。
結果から考えられる児童生徒の実態	・どの教科においても、「複数の情報をまず自分で整理し、自分で文章を組み立てて表現する」という流れについて考え、文章を組み立てることが課題。 →「用語」を使った説明や論理的に組み立てるなどの訓練は継続的に必要。 →「書くこと」については、自分の考えを整理し、理由や根拠を明確にしながら、目的に応じた文章として表現することの訓練を重ねることが必要。 ・基礎学力の定着が見られた。

③	中間評価	
学力向上策の実施状況	評価(※)	学力向上策(1)・(2)ともに実施することができている。具体的には、学校DX部と連携をし、複線型学習についての研修を行ったり、学校課題研修では、深い学びに到達するための手立ての構築・実践を中心に研修を進めたりすることができた。学習サイクルの定着がまだ十分とはいえないため、今後も実践を続けていくのと同時に、(1)については、児童の実態を踏まえ、学び方が適切であるかどうかを児童が自分で確かめていけるよう指導していく。
	B	
⇓		
学力向上策の見直し	(変更なし)	

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
⇓	
結果から考えられる児童生徒の実態	

⑤	年度末評価	
学力向上策の実施状況	評価(※)	
⇓		
今年度の成果と次年度の課題		

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）